

原 著

心理臨床面接における性差と ジェンダーに関する問題生起のプロセス

奥野雅子*

The process through which problems related to sex differences and gender emerge in psychotherapeutic counseling.

Masako Okuno*

Abstract

The purpose of this study was to map the process through which problems related to sex differences and gender emerge between therapists (Th) and clients (Cl) in psychotherapeutic counseling. The subjects were 20 clinical psychologists and data were collected from semi-structured interviews and analyzed using modified grounded theory. Interpretation of the findings resulted in a model with five stages: "first reference to gender by Th," "attempt at prevention of problems by Th," "response by Cl," "coping effort by Th," and finally "stagnation of therapy." These stages were further reduced to twelve sub-categories and twenty-eight concepts. The issue initially arises as a result of a reference to gender by the Th and the Th's subsequent attempt at problem prevention. As the Cl responds to them, the Th makes an effort to cope with their reactions before stagnation of therapy is experienced. We suggest that a vicious circle of communication between Th and Cl exists in this process and discussed this relationship with them under the umbrella of sex differences and gender.

Key Words: psychotherapeutic counseling, gender, sex difference,
occurrence of problems, communication

I 問題と目的

心理臨床面接では、女性及び男性特有の問題やジェンダーに関する相談を取り扱うことが多い。直接的には性被害（村本，2004）やドメスティック・バイオレンス（榎田ら，2004）、異性関係（星野，2012）や性に関する嗜癖（妹尾，2001）などが挙げられる。また、間接的にはうつなどの精神疾患の発症に性役割の葛藤が引き金となりえること（秋山，2003）や、青年期に発生する問題にジェンダー観が要因として絡んでいることもある（中村，2011）。これらは、性やジェンダーに関する

問題がクライアント（以下、Cl）の主訴に直接的あるいは間接的に影響していたことを示している。よって、Clが抱える問題を解決するに際し、セラピスト（以下、Th）とClの間にある性差やジェンダーに関わる事象が面接に及ぼす影響を常に意識する必要がある。

まず、ThとClの関係性においてしばしば生起する転移について、どのように重要他者を投影していくかは性やジェンダーに関わる事象に関係していることが考えられる。転移はClがThに向けた特定の感情を意味するが、最初の発見は精神分

* 岩手大学 (Faculty of Humanities & Social Sciences Iwate University)
受領 2014.10.6 受理 2015.2.1

析の創始者であるFreud (1895) の「ヒステリー研究」においてであった。当初は転移が治療抵抗となり面接の障害になることが指摘されたが、その後は転移を用いて治療の原動力とする捉え方が呈示された (Freud, 1912)。特に、恋愛性転移については倫理的側面を十分配慮しつつ、転移性の恋愛を引き起こしたCIの本質に介入することを重視すべきであるとされている (Freud, 1915)。また、逆転移は転移の反対でTh側のCIへの感情反応であり、これも治療の妨害になるThの盲点とされたが (Freud, 1910)、その後の精神分析家たちによってThが逆転移を引受けることによる治療的意義が見出された (Kernberg, 1965; Sandler, Dare & Holder, 1992)。このように、精神分析では当初から性やジェンダーをめぐる事象について議論されてきたが、その後は様々な心理療法においてもThとCIの「治療的距離」(土居, 1961) の概念が提示された。治療的距離とは“患者を助けることを治療者自身の個人的要求の外におくことによって保つ距離”と定義されている。心理臨床面接を進める中でThとCIの間で性差やジェンダーをめぐる事象によって、その距離が揺らいだとしても、感情を交流させながら一定の心理的距離を維持し支援の枠組みを守ることが必要であるといえる。

一方、フェミニズムの立場からも性やジェンダーをどのように扱っていくかについて述べられてきた。Miller (1976) は、男女の性格や行動の間には本質的差異があるとしても、女性の特性や役割に関連する人間的属性を長所として肯定的に捉えていく必要性を指摘している。フェミニズムの原理をカウンセリングの実践に活用したフェミニストカウンセリングと呼ばれる面接では、女性の社会的不平等として捉えられた問題に対する解決や、性役割を超えて女性の再社会化を目指している (Gilbert & Scher, 1999)。

それではCIの問題解決を支援する際に、Thは

性やジェンダーに関する配慮をどのように行えばよいのだろうか。このような配慮については臨床現場でヒューマンケアを行う上で重要な課題といえるが、十分な議論が尽くされているわけではない。まず、女性あるいは男性のThによる配慮のあり方は、CIとの性差や取り扱う問題によって異なることが予想される。たとえば、性被害を受けた女性CIとの面接は女性Thが適切であるという考え方がある。近年の医療現場でも同様の流れがあり、性差やジェンダーへの配慮として性差医療 (ジェンダーセンシティブメディスン) という概念が提唱された。性差医療は、男女の生物学的性差やそれぞれの特有な疾患、あるいは男女の社会的位置付けなどに着目し、1990年代にアメリカを中心に始まった。日本では、2003年に女性専用外来が開設され女性医師を担当させることで治療に配慮が行われた (天野, 2004)。この配慮は、女性患者が男性医師に女性特有の問題を話すことに生理的抵抗感を抱くことが懸念されたためである。ところが、女性医師に対する共感能力への期待が大きなギャップとなり逆に失望感をもたらす結果となった (山本, 2006)。臨床現場で行われる支援において専門家と非専門家の性差にのみ障壁があるならば、同性の専門家が対応すれば解決するはずであった。しかし、事態はそう簡単ではなかったため、性差を踏まえた上で同性・異性の専門家がそれぞれどのようなコミュニケーションを用いるかという視点が重要であるといえる。よって、臨床現場における性差やジェンダーへの配慮を行うためには、それらをめぐる問題がCIとThのコミュニケーションの相互作用によってどのように生起するかを明らかにする必要がある。

まず、性とジェンダーに関して概念を整理する必要がある。生物学的性を「セックス」とすると、文化的・社会的・心理的な性のあり方が「ジェンダー」となる。こうあるべきといった性役割感、男性性・女性性や男性らしさ・女性らしさなどに

相当する（伊藤・國信, 2004）。つまり、ジェンダーは性に対する社会的意味付けである（青野・森永・土肥, 1999）。これらの概念を心理臨床面接の場を導入すると、CIにとってThが女性か男性かによる印象や認識の差異は、CIのジェンダー観に左右されることになる。Thも同様に、CIが異性か同性かによるアセスメントの変化やアプローチの方向性についての考えには、Thのジェンダー観が反映される。このような個人がもつジェンダー観は過去の生育歴で決定されるようなパーソナリティの中に存在するといえる。一方、ジェンダーは「個人がもつ (having) ものではなく、行う (doing) もの」(West & Zimmerman, 1987)、「流動的かつ状況依存的」(Connell, 2002) であるという考え方もある。長谷川 (2006) も、ジェンダーを今ここに行われているコミュニケーションの中から女性性、男性性が表出するという視点に立って捉えてみることを提案した。この捉え方は、「空間的ジェンダー論」(長谷川, 2006) として提唱され、「ある男性の男性性はまわりの者との相互影響によって維持される。ある女性の女性性を支えているのも相互影響である。男性的にみえる男性でも周りの状況によってはむしろ女性的にもなりえる。女性についても同様であると考えうる」と説明されている。つまり、コミュニケーションの相互作用の中でジェンダー表現を動的に捉えたシステム論的な立場である。

このように、コミュニケーションの相互作用に焦点を当ててジェンダーを捉えることは「人間コミュニケーションの語用論」(Watzlawick et al., 1967) が理論的基盤となる。この理論では、コミュニケーションを送り手から受け手へと一方向的直線的には捉えず、双方のやり取りを円環的循環的に視る立場を取る。つまり、この見方は個々を別々に切り離して見るのではなく、コミュニケーション行動で相互影響し合うひとつのシステムとして関係論的に見ていくことになる。そして、こ

のシステムの中に存在するコミュニケーションの相互作用に着目することで、そこに一定のパターンを発見することができる。そして、関係が悪化している二者の問題解決を探索する際、一方の性格や特定の行動を原因として追究し排除しようとするのではなく、二者のコミュニケーションの相互作用で形成された悪循環パターンを見出し、それを切断するための介入を探索する。たとえば、不満が増大する夫婦のコミュニケーションパターンの例として、一方が要求し続ける反面、他方がその場から退くという相互作用がある (Sullaway & Christensen, 1983)。つまり、一方が対話しようとする関わりを増やそうとすればするほど、他方はその関わりを避けようとし、その関わりを避ける行動が相手にはますます対話を増やそうとする行動に結び付くと考えられている。ここでは悪循環パターンが生起しない別のコミュニケーション行動を探索することが問題解決になる。このように、現象を相互作用パターンで捉えるならば、CIとThの間で性差やジェンダーをめぐる問題が生起した場合でも、CIあるいはThの性やジェンダー、あるいは一方の特定の行動にその原因を帰属させる事態にはならない。問題の生起は両者の性やジェンダーを踏まえた上で双方の間で展開されるコミュニケーションの循環が支援に関して効果的に機能していない状態と捉えられる。

本研究では、効果的なヒューマンケアを行う際に抵抗となりうる性差やジェンダーの問題がどのように生起するかについて検討する。心理臨床面接において性やジェンダーに関する問題がCIとThのコミュニケーションの中で生起することに着目し、そのプロセスを明らかにすることを目的とする。

II 方法

1) 調査協力者

調査協力者は、5年以上臨床経験のある臨床心

表1. 面接協力者一覧

No.	臨床心理士	性別	年齢	臨床経験年数	臨床領域
1	A	男	34	7	教育・医療・福祉
2	B	男	34	10	教育・医療・福祉
3	C	女	32	9	教育・医療・福祉
4	D	男	39	9	教育・医療
5	E	女	47	25	教育・医療
6	F	男	60	35	教育・医療・福祉
7	G	女	33	10	教育・医療・福祉
8	H	女	45	18	教育・医療
9	I	男	34	8	教育・医療
10	J	女	27	5	教育・医療
11	K	男	36	13	教育・医療
12	L	女	59	5	教育・福祉
13	M	男	32	9	教育・医療
14	N	男	34	12	教育・医療・福祉・産業
15	O	女	32	7	教育・医療
16	P	男	33	10	教育・医療・福祉
17	Q	女	51	6	教育・医療
18	R	女	43	19	教育・医療
19	S	女	41	17	教育・医療・福祉・産業
20	T	男	44	15	教育・医療・福祉

理士20名（男性10名、女性10名）である。平均年齢は39.5歳（SD=8.9）、臨床経験の平均年数は12.5年（SD=7.3）であった。これらを表1に示す。

2) 調査時期

2011年3月から2013年1月である。

3) 調査手続き

対象者には事前に依頼状を送付し、調査の概要を伝えた。調査方法は、個別の半構造化面接であり、面接は面接者や対象者の職場などで実施した。面接の前に、対象者に調査目的などを説明し録音許可の同意を得た。この際、倫理的配慮として面接の筆記記録や録音媒体を厳重に保管し、分析では調査協力者の氏名が特定されないよう配慮すること、面接記録を論文として公表する際はプライバシーが侵害されないよう最大限の注意を払うことを口頭と文書で伝えた承を得た。さらに、

調査協力者の権利として面接の最中でも面接の中止を求めることができ、質問への回答を拒否することもできること、筆記記録または録音を停止あるいは一時的に停止することができること、希望すれば記録を見ることができることも合わせて口頭と文書で伝えた後に面接を開始した。

まず、“CIとの面接でCIや自身の性別やジェンダーに関する意識のあり方”を尋ねた。ここで意識について質問したのはこの意識のあり方が面接におけるThのコミュニケーション行動のあり方に影響を与えると考えたからである。続いて面接プロセスにおいてThの関わり方の変化、および、面接に困難を感じて問題が生起していく文脈について尋ねた。質問項目を表2に示す。本稿では、ジェンダーに関する問題生起のプロセスを中心にまとめた。面接に要した時間は50分～90分であった。

表2. 面接調査質問項目一覧

1	CIと面接を行う際に、ご自身の性別やジェンダー、CIの性別やジェンダーをどのくらい、どのように意識していますか。
2	ご自身が面接で用いているコミュニケーションは、初対面時、援助の中盤、終盤において変化している点はどのようなことですか？
3	面接を行うなかで、性差やジェンダーの問題でこれまで困難を感じた点はどのようなことですか。
4	上記のことに対して対処したときに、支援がうまくいかなかった事例と成功した事例についてお聞かせください。

4) 分析方法

本研究では、心理臨床面接においてジェンダーに関する問題が生じていくプロセスをThとClのコミュニケーションの相互作用に焦点を当てて検討するために質的研究法を用いることが適切と判断した。その中でも、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下，2007）（以下、M-GTA）を採用した理由として、研究協力者が自覚していなかったことを表現する場合も少なくないと推測し、表現した言葉の意味の解釈という観点から心理的プロセスを扱いたいと考えたからである。また、理論モデルの生成を目標とし、それをヒューマンケア分野に関わる臨床現場で実践的に活用する可能性を考慮したからでもある。分析テーマは「性差やジェンダーに関する問題が生じていくプロセス」と設定し、ThとClの相互作用およびThの感情や認知の動きについて着目した。分析焦点者は「心理臨床面接を行う臨床心理士」とした。

分析手順は以下のように行った。①面接の逐語記録について分析焦点者の視点に基づき、分析テーマを意識しながら関連箇所に着目し、一つの実例として他の類似実例も説明できる概念を生成した。②概念の生成の際には分析ワークシート（概念の名称、定義、具体例、理論的メモを記述）を作成した。③新たな概念の生成と既存の概念への具体例の追加を繰り返した。④概念生成が恣意的になるのを防ぐために類似例だけではなく対極例との比較を行い、具体例の十分な収集を試みた。⑤生成した概念と他の概念の関係を個々の概念ごとに検討した。⑥複数の概念の関係から成るカテゴリを生成し、カテゴリ相互の関係から分析結果をまとめた。20人目を分析した時点で新たな概念生成が成されなかったため、理論的飽和に達したと判断し、分析を終了した。

なお、分析方法の妥当性を担保するために、データの解釈や生成されたカテゴリに矛盾がないかに

ついて2名の調査協力者によるメンバーチェックを行った。さらに、質的研究者にデータ収集と分析結果に至る道筋についてスーパーバイズを受け信頼性と妥当性の確保に努めた。

Ⅲ 結果と考察

分析の結果、28個の概念、12個のサブカテゴリ、5個のカテゴリが生成された。カテゴリと概念、その定義とバリエーションを表3、結果図を図1に示す。なお、図1における1本線の矢印はサブカテゴリ間の影響、中抜けの矢印はカテゴリ間の影響を表している。また、相互影響を表す場合は曲線で表現した。

以下、概念を【 】, サブカテゴリを< >、カテゴリを≪ ≫で表す。

生成された各カテゴリにおける概念を含むプロセスを記述していく。

1. 生成されたカテゴリ

1) 性やジェンダーをめぐるThの最初の構え

心理臨床面接における初回面接時にThはClとの間で性やジェンダーに関して意識し始める。このような<Thのジェンダー意識>が、面接の始めにThによる<面接へのネガティブな認知>を生起させることがある。そこではThが特定の性やジェンダーに関してやりづらさを感じる【苦手意識】と、Th自身の性やジェンダーが当該Clへの援助効果を低下させることを懸念する【援助に対するThの効力感不全】が見出された。同時に、ThがClによって<引き起こされる感情>には、異性Clにどのように関わったらよいかという【異性Clに対するThの戸惑い】と【女性の男性に対する恐怖感喚起】がある。これは女性Thが男性Clに対する恐怖感と、男性Thが女性Clに恐怖を喚起させているのではないかという思いも含まれる。また、Thの性がClの希望とは異なることで面接がうまくいかなくなることをThは推測し、申し訳ないと思う【性差不適合によるClへの罪悪感】も存在する。

表3. M-GTA カテゴリ、概念、定義、バリエーション（具体例）の一部

概念	定義	バリエーション（具体例）
カテゴリ1《性やジェンダーをめぐるThの最初の構え》		
サブカテゴリ1<Thのジェンダー意識>		
Thのジェンダー意識	ThがCIに対して、自分が男性として、あるいは、女性としてどのように映っているのかを意識すること	こう女性だから性の対象にされるじゃないですけどなんかそういうような感じがあるのかないのかみたいなのがあったんですけど。(G) お父さまはだいたい、あ、女の心理士か、って顔なさるんで、というふうに私が見受けるんですよ。(L)
サブカテゴリ2<面接へのネガティブな認知>		
苦手意識	Thが特定の性やジェンダーに対してやりずらさを感じる	僕は、女の子の人間関係みたいなそういうの苦手で・・・だから女の子のそんな話とか聞いても分からないですよー (A)
援助に対するThの効力感不全	Thが自分の性やジェンダーに関する点でCIへの援助の効果が低下すると思う	性被害だったりとかDVだったりとか、男性が力で女性を、男性性みたいな感じでグーッと押さえ込んで、主従関係というか・・・(略) その女性、被害者のほうが複雑性PTSDそんな感じの状態になっている時に男性としてのセラピストがどう関わるかです。そこがやっぱり一番困難を感じる。(T)
サブカテゴリ3<引き起こされる感情>		
異性CIに対するThの戸惑い	異性CIの行動にThが戸惑うこと	私がただ一方的に一瞬ちょっと戸惑うっていうかダイレクトな話題が男性から話されるっていうことにあまり慣れてないとか、普通、面接の場であまり話されることはなかったの。(J)
女性の男性に対する恐怖感喚起	女性が男性に対して抱く恐怖感	男性だからやっぱり体力的に力がある人だったりそういう人が暴力の話をするとか、今も暴れだしそうだって言われたら、怖いと思うとか、ああいうのは女性よりも全然怖いですね。(C)
性差不適合によるCIへの罪悪感	性差によって面接がうまくいかないであろうと予測し、申し訳ないと思う	どうしても女性のクライアントさんが多いので、選択の余地もなくして私という男性のカウンセラーしかお相手できませんということで、引け目じゃないですけど、申し訳なさとかを感じることはあります。(B)
カテゴリ2《問題を予防しようとするThの試み》		
サブカテゴリ1<異性Cによりその努力>		
異性CIに頑張って共感を示す傾向	異性CIへの理解が不十分という懸念から共感しようと必死にコミュニケーションを行う	逆にアクティブに共感するっていうか、自分はよくわからないけれどそんなに辛かったりとか、大変だったりとか、わけが分かんなくなったりしてんだねっていうそういうところはやっぱり頑張ってしますよ (A)
服装に関する配慮	ThがCIとの面接に支障がないように、あるいは有効なように自分の服装を意識する	地味ですね。あのう必ずそうしてます。特徴のあるような服やイヤリングやアクセサリ等は付けないようにしてますし。(L) 自分の服装から氣にして、たとえば夏であっても、なんだろう、過度な露出にはならないような形で (D)
サブカテゴリ2<性差やジェンダーを意識した対人距離と位置の調整>		
異性CIに対して身構える	異性のCIと物理的距離が近くならないように配慮し、心理的距離が近くならないようにフィードバックを抑制する、あるいは、言語化することで転移を予防する	恋愛性転移みたいなこと、ちょっと中立性から外れるような動きをするときに、それをする時の抵抗だったり、やっぱり断ろうって思うのが、男性の方がやっぱり早いと思うんですけどね。対処がちょっと難しいっていうのとそこに氣を使うって感じですけど。(H) やっぱりお父さんだと、いつもより知的に見えるように話して、社会の情勢とかも話し、会社でいかがですか？大変ですよ？みたいな。(L)
男性CIに対するワンドウン	男性CIに対し、より低い対人位置でThがコミュニケーションを行う	向こうが男性みたいな感じだとこっちがワンドウンでいいわけだからね、ワンドウンするのは辛くないけど、でもその警戒してるっていう意味で、ワンドウンしてる。(K)
カテゴリ3《Cからの反応》		
サブカテゴリ1<異性Cのセラピーに対する抵抗>		
性が異なるため語ることに関するCIの抵抗	CIとTh間の性差によってCIが自分自身にことを語ることに対する抵抗感	うまく話せないとか、ちょっとこの人信頼できないとか、躊躇するというのがそれ以上ちょっと***フェイドアウトしたりとかってことはある気がしますね。そこに性差が関係しているのかっていうのはちょっと、もしかしらあるのかもしれないですけど。(B) 男性の方が自分の事話すことそのものに抵抗が大きい人が多くて、「カウンセリングなんて」みたいな感じの人とかも居るから、その準備が女性の方がもっとスムーズに話す気満々で来るとか (C)
女性CIによる的外れの回答	男性Thの質問に関して女性CIの回答が的確に返ってこないこと	振り返れなかったりとか、出来事の話が出ないとか、うん、そういうふうなところがあると、イライラするっていうかなんかちょっともどかしい感じはやっぱりすることがありますね。(M)
異性CIによる枠を外す試み	異性CIが面接の枠を破ろうと試みてくること	枠を崩していくという感じで。でも枠は枠でちゃんと、必要なので、って言っていると、また色々試し行動があったりとかですね。(T)

概念	定義	バリエーション 具体例)
サブカテゴリ<同性CからThへの挑戦>		
同性C1による対抗意識の表現	同性C1がThに対抗意識を向けること	うまくいっていないのが女性同士の感じがあって、相手の方が引け目を感じる方だったりした場合とか、ライバル意識を持つ方だったりするときがある。 (S) 先生がお化粧しないのは自分に自信があるんですか？とか。あの時は女性としての私というのにすごい反応されてた。 (C)
同性C1による優位性の主張	同性C1からThの人生経験の足りなさを言及することで優位性を表現する	なぜそういう道を選んだのかなど思いながら聞いている時に、そういう女性の想いは、その「あなたには分からないのよ」って、「若いあなたには」みたいなことを言われて、ま結局それも中絶するみたいなかたちで (H)
同性C1から怒りを向けられる	同性C1からThに怒り感情をぶつけられること	攻撃してくる。その言葉じりをとらえられて、あんたがそういうふうにするのは、自分では分らないとか言われるのは逃げですよとかね。そういうような形で言われ本当に大変でしたね。 (R) いろいろ言っても、あなたはどうぞせわがってくだらないとかなんかそういうふうにするのは女の子のほうが多い感じが。 (Q)
カテゴリ4<Thの対処努力>		
サブカテゴリ<Thの行動抑制>		
引っ張っていくコミュニケーションの抑制	ThがC1に対し引っ張っていくようなコミュニケーションを抑制する	今までずーっと女性的なコミュニケーションスタイルでやってきたと思うんですよ。でも、ある程度男性的な、仕切ってもってみたいなの求められるなあとか・・・引っ張ってみたいなのをほとんどしてないから、全然破たんがなかったんだけど、そっちの方が難しいじゃないですか。 (D)
転移を意識した介入の抑制	転移を促進しないように異性のC1に積極的に関わることを控え、介入を抑制する。	逆に私がコンプリメントをすることによって、クライアントさんが陽性の転移を私にできてしまうかもしれないということも意識しながら。やっぱりどこか意識しながら、言及を控えているなっていう感じはあります。 (P)
同性C1との居心地の良さによる変化への消極性	同性C1との関係の居心地の良さのため、セラピーを変化させることに消極的になる	2人で話していること自体が安心できる場で、語りに来ているってことで、それ以上一歩踏み出して、症状が変わればいいのになんていうとこまでなかなか踏み出せないですね。だから事態は変わらないんですけど。 (B)
サブカテゴリ<Thのアクティブな行動化>		
同性C1と同じ土俵に乗る	同性C1のパターンの再現の視点になること	ついでにこうっていうイメージが強すぎるとやっぱり方針出せなかったりとか向こうの不安にひきずられてしまうこともあるのでそういう部分では少し難しいのかな、って思うんですが。 (M)
介入を急ぐこと	Th-C1間の性差によるラポール形成の速度を考慮せずに、介入を急ぎ進展させようとする	その人に信頼されるまでに時間がかかったってことかな。だから、介入を、進展を急ぎすぎたのかもしれない・・・(略)・・・だからベースに合ってなかった。 (D)
カテゴリ5<セラピーの停滞>		
サブカテゴリ<性やジェンダーをめぐる俯瞰のゆらぎ>		
異性C1に対するアセスメントの迷い	異性C1に対してアセスメントが定まらず、面接の方向性に迷いが生じる	結果としてその自分の溜飲は下がっても、相手にとってどうなのかっていまだに判断しきれないところはあつたりしますね。 (I)
Thの性的体験による影響	Thの性的体験の状況によって余裕が低下してC1理解が抑制されること	経験とか自分自身の性とかが関係ありますか。自分がまだ結婚してなくてとか、付き合ってる人もいるかいとかいう状態で、相手の人の性関係について触れるってやっぱりちょっと覚悟が要りますよね。 (E)
女性Thの個人的状況がC1に影響するという懸念	Thの結婚・出産などの状況がC1の問題に影響してしまうのではないかという懸念	その方のいろいろ抱えている問題の中の一つで、大きく関わってるなってクライアントさんと面接中の時に自分が妊娠してとかっていうような時、で休みに入るだとか、そういうような時にやっぱりすごく性的問題っていうことで、思ったり・・・それがどんな風に受け止められるかとか。 (H)
サブカテゴリ<異性C1に対するThの抵抗>		
異性C1に対する性に関するテーマについての抵抗感	性に関するテーマに関して質問をすることが恥ずかしい	私自分の中で、異性のクライアントに性関係について聞くってことはちょっと考えられないんです。考えられない、もう全然考えられないんです。 (E)
異性C1に対してリスクを冒したくないという思い	異性C1にこの介入をしたらリスクを冒すことになるためセラピーを失敗したくないと思うこと	重い口を開かせるっていうことだけで考えたら話をずらすっていうのはいいと思うんですが私にとっては1つの冒険というか (B)
サブカテゴリ<性やジェンダーをめぐるThの動揺>		
特定の性やジェンダーに否定的な思いに囚われる	ThがC1の特定の性やジェンダーに対して否定的な感情や思いに囚われる	やっぱり女の子のほうが一歩引けたりとか。男の子でそういうのはあまりないけど、女の子だったら、やっぱりどうしようもないこと、自分の母親が気に入らなくて、いろいろ言っても、あなたはどうぞせわがってくだらないとか言うのは女の子のほうが多い感じが。 (Q)
異性C1の反応にうろたえる	異性C1の反応に、冷静な感情処理ができなくなる	だからもう向こうは、こちらをセラピストとしてはもう見れない方だったんだと思うんですね。もう頭の中が、女っていったら全部性的対象っていう方だったみたいで・・・自分としてもすごく動揺するっていうか、恐ろしさを感じながら、ほんとに襲い掛かれたらどうしようみたいな感じ。 (S)
転移感情による支援関係の崩壊	ThがC1の転移感情を扱いきれず、セラピーの継続が困難となること	陽性転移みたいな感じで、むけられたらすると、恋愛感情とか。で、失敗したのは、「もう無理です」みたいな・・・(略)その、断り方ももう関わるのがしんどかったんだと思うんですけど、わりともうバツサリ切ったというケースも。 (I)

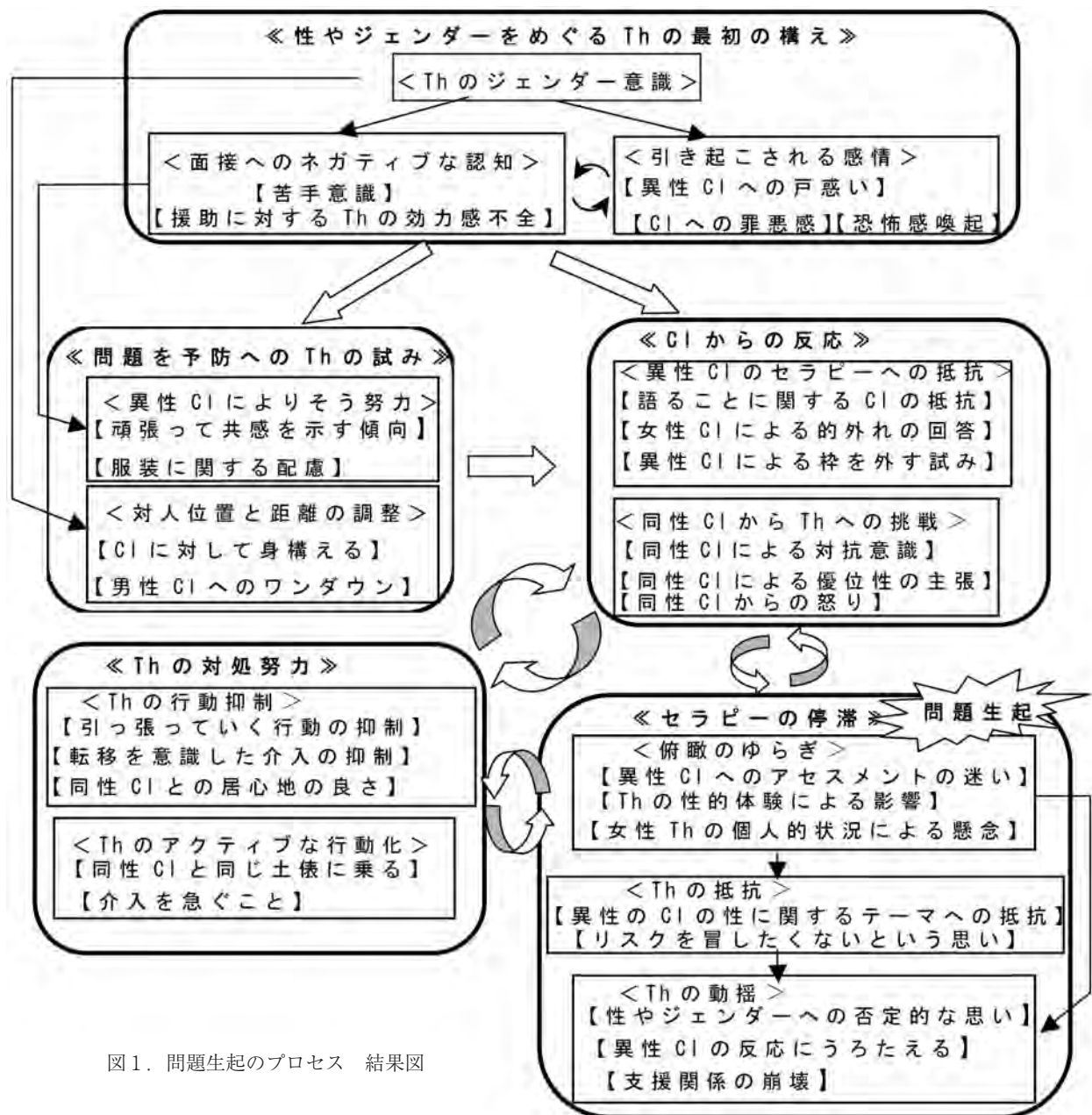


図1. 問題生起のプロセス 結果図

2) 問題を予防しようとする Th の試み

CIとの面接を継続するプロセスで、《問題を予防しようとする Th の試み》がなされる。その試みには＜異性CIによりそう努力＞と＜性差やジェンダーを意識した対人距離・位置の調整＞の2種類が見出された。前者は、異性CIへの理解が足りないという不安から【異性CIに頑張って共感を示す傾向】と、異性CIとの面接時に【服装に関する配慮】を行うことである。後者は、

異性CIとの物理的・心理的距離が近づきすぎないように【異性CIに対して身構える】ことと、男性CIに対してThがより低い対人位置でコミュニケーションを行う【男性CIに対するワンダウン】である。

3) CIからの反応

問題を予防しようとするThのコミュニケーションに対し、問題生起につながるような《CIからの反応》がある。それは、＜異性CIのセラピー

に対する抵抗>と<同性CIからThへの挑戦>に分かれる。異性CIの反応として【性が異なるため語ることに関するCIの抵抗】や、男性Thの質問に関して【女性CIによる的外れの回答】があり、【異性CIによる枠を外す試み】もなされる。一方、【同性CIによる対抗意識の表現】や、【同性CIによる優位性の主張】が行われ、さらには【同性CIから怒りを向けられる】といった<Thへの挑戦>がなされる。

4) Thの対処努力

Thは<CIからの反応>に関して対処努力を行っている。まず、<Thの行動抑制>という対処を取る。Thは【引っ張っていくコミュニケーションの抑制】を行い、さらに【転移を意識した介入の抑制】にもつながる。同時にThは【同性CIとの居心地の良さ】を経験することでセラピーに変化を導くことに消極的になることがある。このような<Thの行動抑制>の他方、<Thのアクティブな行動化>といった現象も生起する。それは、Thが【同性CIと同じ土俵に乗ること】とTh-CI間の性差によるラポール形成の速度を考慮せずに【介入を急ぐこと】にもつながる。

5) セラピーの停滞

支援が難しくなっていくような問題生起として、Thによる<性やジェンダーをめぐる俯瞰のゆらぎ>、<異性CIに対するThの抵抗>や<性やジェンダーをめぐるThの動揺>がある。まず、【異性CIに対するアセスメントの迷い】、【Thの性的体験による影響】や【女性Thの個人的状況がCIに影響するという懸念】のためにセラピーの方向性が定まらなくなる。一方、セラピーの進行に伴い<異性CIに対するThの抵抗>も現れる。それは【異性CIに対する性に関するテーマへの抵抗感】と【異性CIに対してリスクを冒したくないという思い】である。さらに、<性やジェンダーをめぐるThの動揺>では、ThがCIの行動に対し【特定の性やジェンダーに否定的な思い

に囚われること】となり、Thが【異性CIの反応にうろたえること】、そして、【転移感情による支援関係の崩壊】に陥ることにもなりえる。

2. ストーリーライン

性やジェンダーに関する問題生起である<セラピーの停滞>に至るストーリーラインについて以下のように考察する。まず、セラピーが進まなくなるという問題生起の背景として、Thは自分が男性／女性としてCIにどう見られているかを意識して構えることから始まる。特に、異性CIに対してThは構えてしまうことが多い。このような【Thのジェンダー意識】はThによってその強度には差がある。CIは自分とは異なる性のThを期待してきたのではないかと推察することや、Th自身が性の対象とならないよう構えるというように、性やジェンダーに関して強く意識する場合がある。また、Thは最初から特定の性やジェンダーに関する【苦手意識】を所持し、効果的な支援ができないのではないかと【援助に対するThの効力感不全】を抱えていることもある。こういった<面接へのネガティブな認知>と同時に、Thの内的プロセスに<引き起こされる感情>がある。それらには初回面接において異性CIの言動や行動にThが戸惑うことや、女性Thが男性CIに対して恐怖感を抱くこと、あるいは男性Thが女性CIに恐怖感を抱かせたのではないかと懸念すること、そしてThが自分とは異なる性のThのほうが当該CIに相応しいと推察しCIに対して罪悪感を持つことが挙げられる。これらの感情はネガティブな認知を強化することにもなり、認知と感情は互いに影響を及ぼし合っていると考えられる。

このようなThの最初の構えに対し、CIの側にも当然、Thとの間で性やジェンダーに対する構えは存在する。両者の構えから発せられるコミュニケーションの相互作用の中で面接に支障をきたさないよう予防する試みをThは行うことにな

る。Thは＜面接へのネガティブな認知＞を補完する目的で、ラポール形成をスムーズにしようと、特に＜異性CIによりそう努力＞を行う。異性CIに対しThが理解しにくいテーマである場合、

【異性CIにがんばって共感を示す傾向】が生じる。この傾向は男性Thが女性CIに対する行動であることが多い。また、【服装に関する配慮】を行って好印象で面接を継続させようとする行動は、女性Thが男性CIに対しなされる努力である。一方、ThはCIとの間で＜性差やジェンダーを意識した対人距離・位置の調整＞を行い、CIに近づきすぎないように努めている。恋愛性転移を予防しようと【異性CIに対して身構える】ことや、男性CIに対しThは対人位置を低くしてワンダウンの姿勢で面接を行っている。

このようにThは面接の初期に性やジェンダーに関する《問題を予防しようと試み》を行うが、それらに対してThが感じるCIの反応は様々である。問題生起の兆しとして、異性CIがThに自身について語ることに抵抗を示すこと、また、特に男性Thの論理的な質問に対して女性CIが的外れの回答をすると感じるようになること、さらに、異性CIが面接の枠を外そうと試し行動を取るといったことも現れてくる。これらの事態は＜異性CIのセラピーに対する抵抗＞として表出するものといえる。よって、ThがCIに関する情報収集が充分に行われずアセスメントが困難になる可能性があり、CIとの協働作業が行いにくくなる。一方、同性CIがThに挑戦するように振る舞うことも起こる。それはCIの重要他者をThに投影することで対抗意識を表現し、さらにそこから攻撃的な行動に展開することもある。Thの人生経験の足りなさを指摘することで自分が優位に立とうとすることや、Thに怒り感情をぶつけるといった直接的な攻撃にも至る。

Thは継続する面接の中でCIと葛藤的にならないよう関係を守るためにCIに対する能動的な関

わりを抑制するという対処を行う。具体的には、CIを引っ張っていくようなコミュニケーションを回避し、Thが主導権を取るような状況を避けるといった形で現れる。また、転移感情を促進しないように異性CIに対して積極的な介入を抑制し、同性CIとは形成されたラポールによる居心地の良さによってそこからの進展が遅れることにもなりえる。このように＜Thの行動抑制＞という対処努力はCIとの葛藤を回避するためになされる。ところが、Thの中にはCI支援に寄与してはいないのではないかという内的葛藤を生じさせていることが考えられる。一方、Thは対処のあり方について試行錯誤し、様々な選択肢を模索し積極的な行動を選択することもある。ThはCIの視点から物事を捉えるよう努めることでCIと同じ土俵に乗りCIのパターンの再現となる事態が、特に同性CIとの間で起こりうる。また、CIに変化がないことへの焦りにより、性差やジェンダーに合わせた適切なラポール形成の速度を考慮せずに、Thは問題解決を進めようと介入を急ぎ進展させようとするということにもなりえる。これらも＜Thのアクティブな行動化＞という対処努力のひとつである。

しかし、《Thの対処努力》に効果が上がらなければ、セラピーは次第に停滞していき、支援を続ける上で問題が生起してくる。この事態はこれまでの面接で性やジェンダーに関するコミュニケーション行動の積み重ねによって生起したと考えられる。まず、Thには俯瞰的視座がゆらぐという事態が起こり、Thの余裕が低下していく。そこでは、Thの関わりを異性CIがどう受け取るかについてTh自身が不確かになり、アセスメントが定まらなくなる。アセスメントの迷いは面接の方向性を見失うことにもなりえる。また、Thは面接テーマによっては自身の性的体験の有無や状況が影響すると考え、CIを理解することが困難であるという認知に陥ってゆく場合がある。そ

して、女性Thにおいては自分の結婚や出産などの個人的状況がCIの問題にネガティブに作用するという懸念も俯瞰的視座に影響を及ぼすといえる。一方、セラピーの進行に伴い＜異性CIに対するThの抵抗＞も現れてくる。それは、異性CIが性に関するトピックを語ることにThが抵抗を感じてCIへの質問をThが回避することにつながる。また、ThはしばしばCI支援の効果について評価を受ける状況にある場合、セラピーを失敗したくないという気持ちが生じてしまう。そして【異性CIに対してリスクを冒したくないという思い】が強化されていく。さらに、＜性やジェンダーをめぐるThの動揺＞といった事態に至ることがある。ThがCIとのこれまでの継続面接を通して特定の性やジェンダーに対して否定的な感情や思いに囚われてしまう時がある。また、面接中に異性CIの反応に冷静な感情処理ができなくなってしまうこと、さらに、CIの転移感情を扱うことができなくなり、支援関係が崩壊することでセラピーの継続が困難に陥ることがある。

Ⅳ 総合考察

1. CIとThのやり取りの悪循環から問題生起へ

特定の性やジェンダーが苦手という初期条件がTh側に存在することが、必ずしも支援を困難にするような状況に至らしめるわけではない。そういった初期条件をおのおののThが持っていることは自然なことであり、不適切なことではないと考えられる。しかし、その初期条件に加えて、ThとCIとのやり取りの間で何らかの悪循環が生じることによって、支援が困難な状況に陥るのではないかと推測される。つまり、Thの性やジェンダーそのものが直接的な要因となって問題が生起するわけではないといえる。

心理臨床面接を行うThには、Th自身の生育歴やその後の対人関係によって影響された性やジェンダーに関する捉え方がある。それに基づき初回

面接において《性やジェンダーをめぐるThの最初の構え》となる。Thは同性あるいは異性のいずれかのCIに対して【苦手意識】を所持していることが問題生起の出発点であることが考えられ、その【苦手意識】はCIという人物に対するものだけではなく、思春期の摂食障害や性被害などの特定の性やジェンダーに関する話題に対するものも語られていた。【苦手意識】は誰もが持ち得るものであるといえるが、【援助に対するThの効力感不全】として認知された時にCIへの罪悪感を引き起こす可能性もある。このような＜面接へのネガティブな認知＞と＜引き起こされる感情＞にThは影響を受け、面接を進める上で支障がないよう《問題を予防しようとするThの試み》がなされる。それらの試みはCIによりそう努力や、逆にCIとの対人位置や距離を離すことであるが、これらはCIとの協働関係の構築に対してネガティブに働いてしまう場合がある。このような《CIからの反応》についてThが選択した対処努力こそが《セラピーの停滞》を招く方向に作用してしまうと考えられる。たとえば、転移を意識してThが介入を抑制することで面接に消極的になると、CIは面接のイニシアチブを取るために枠を破るような試し行動を始め、Thの余裕が低下してますます介入を控える、というようにTh側の面接に対する抵抗を強化することになる。逆に、介入を急ぐといったThのアクティブな行動化に対し、CIは語ることに抵抗を示し、情報を収集できないThは俯瞰的視座が揺らいで否定的な思いに囚われていく。このようにThの動揺が導かれていくのである。したがって、ThやCIの特定の行動や認知が問題なのではなく、問題を解決しようとした《Thの対処努力》のあり方がCIとの間で悪循環となっていくことで問題が生起すると考えられる。

心理臨床面接において生起する性差やジェンダーに関する問題について、ThやCIの性や所有

するジェンダー観が原因ではなく、両者のやり取りの悪循環と捉えることは「人間コミュニケーションの語用論」(Watzlawick et al., 1967) の立場である。この立場では、ある現象を原因と結果という因果関係では捉えず、原因と結果は循環しているという相互作用として見る。そして、二者のコミュニケーションの相互作用は、あるパターンを形成することが指摘されている。このコミュニケーションパターンこそが問題生起に至らしめる悪循環のパターンとなる可能性がある。このようなTh-Cl間における悪循環の存在がセラピーを停滞させ、Clの主訴の解決を妨げているのではないかと考えられる。

2. ClとThの相補的・相称的関係のエスカレーション

性やジェンダーに関する問題生起はClとThのコミュニケーションの悪循環として捉えられることを述べたが、どのような相互作用が悪循環を生起させているのかについて考察したい。コミュニケーションの相互作用には「相補的」と「相称的」の2種類があることが呈示されている(Watzlawick et al., 1967; Bateson, 1972)。相称的とは相手と同じ行動をするという競争的な関係であり、相補的は相手と異なる行動をする相互補完的な関係であるとされ、全てのコミュニケーションはこのどちらかであるという(Watzlawick et al., 1967; Bateson, 1972)。また、Bateson (1972) は、コミュニケーションがいずれか一方に偏れば対人関係を崩壊させる方向に傾いていくことを指摘している。このような捉え方を援用すると、問題生起に至るClとThのコミュニケーションの相互作用は相補的あるいは相称的関わりのいずれかに偏っていく現象であると考えられる。つまり、ThとClのコミュニケーションパターンは相補的あるいは相称的な方向にエスカレーションし、支援を目的とする対人関係を危うくする事態が生起していることが予想される。

ThとClの相補的関係の具体例では、前述した

ように、Clに補完的に接しようとThが介入を抑制し面接に消極的になると、同性Clが自分の優位性を表現してThに挑戦してくることになり、Thはますます介入を控えるといったエスカレーションが生起し始める。また、女性Thの男性Clへの恐怖感Thの対人位置を低め、相対的に対人位置が高くなったClが面接の枠を破るような行動を始め、Thの余裕は低下し動揺する結果となる。一方、ThとClの相称的関係では、男性Thと男性Clがお互いに社会的地位を意識するようなライバル関係を促進し、それがThのネガティブな感情を定着させてしまう恐れがある。また、男性Thが女性Clへよりそう努力が次第にClと同じ土俵に乗ることになり、Clから距離を縮めてくるような積極的なアクションにうろたえる結果にもなる。女性Thの場合は、女性Clから対抗意識を向けられ競争の関係が表現された際に、女性Thが介入を急ぐといったアクティブな行動化は支援関係を危うくする。このように性差やジェンダーがきっかけとなった相補的あるいは相称的関わりを積み重ねていくプロセスにおいて、Thはその関わりがエスカレーションしていると認識していないならば俯瞰的立場が失われていることを意味する。そして最終的には対人関係を崩壊させる結果に至るため、心理臨床面接の継続は困難になることが推測される。

3. ClとThの性差による問題の差異

性差やジェンダーに関する問題生起のプロセスについて、コミュニケーションの相互作用と関係性の悪循環のあり方はClとThの性差によって異なることが考えられる。ThにとってClの性は何らかのメッセージとして伝わり、どのようなメッセージに変換されるかにジェンダーが関わってくる。そして受け取ったメッセージはThの行動を左右し拘束もする。このように性とジェンダーは複雑に絡み合うため、それぞれを全く別の観点から論じることは難しいが、ThとClの性差自体が

面接に明確な影響を及ぼす事象も存在する。本研究において抽出された概念でも、同性よりも異性CIに対して戸惑い、身構える行動や、がんばって共感を示すこと、また異性CIに対して俯瞰的視座がゆらぎ、Th自身がセラピーに対して抵抗することなどが示唆された。また女性Thも男性Thも男性CIにワンダウンの姿勢を示すことや女性が男性に恐怖感を抱くこと、そして女性Thが服装に配慮する行動には性自体の要因が大きいことが考えられる。たとえば、男性Thは「フォーカシングを行う際にCIが女性であれば身体には絶対触れない」と語り、女性Thからは「自分の結婚出産がCIの主訴にネガティブに影響する」不安が示された。しかし、このような男性Thと女性Th特有の事象が面接プロセスにおける問題として特定されるものではなく、コミュニケーションの相互作用の中でどのように作用するかが重要である。つまり、性のメッセージ性に関するコミュニケーションの相互作用が、あるパターンに陥ることで問題は生じてくることが予想される。

フェミニズムの立場からはこのような問題が生じた場合にはカウンセリングの中で取り扱うべきと主張されている (Gilbert & Scher, 1999)。ThとCIの間で生じた関係性の問題を言語化してCIと共有することで解決する可能性はあるが、すべてのケースに適切というわけではないだろう。一方、日下 (2006) は状況をThの機能低下として理解する必要があると述べ、個人的な罪悪感や防衛的感情に囚われることこそがCIの個々の体験を見落とす危険があることを指摘している。Thは俯瞰的視座を失わないために、自身の性の要因がCIとのコミュニケーションの相互作用にどのように影響を与えているのかについてモニタリングし意識化していく必要があると考えられる。

4. 臨床への示唆

女性、男性特有の問題を支援する際、同性の

Thが対応すれば性差やジェンダーに関する問題生起を必ずしも予防できるわけではないといえる。同性でも異性でもそれらに関する問題は生じうる。Thが女性あるいは男性という性がCIに影響する事象と、性を踏まえた上でのコミュニケーション行動が影響するという二つの水準を踏まえる必要がある。このときThは心理臨床面接におけるCIの主訴を解決するプロセスでThの女性性、男性性がどのように表現されているのかに着目することが重要になる。たとえば、男性からの権力に悩む女性CIに対し、男性Thが指示的に関わることは相補的關係のエスカレーションを生じさせることが考えられる。つまり、男性Thによる指示的コミュニケーションがCIからすると男性性というジェンダー表現に視える可能性がある。また、Thに対して心理的距離を縮めてくるCIと同じ土俵に乗ることは相称的關係のエスカレーションとなる。このような場合、CIとThが同性であればライバル関係、異性であれば恋愛性転移が促進されるかもしれない。

Thがこれまでの人生の中で構築してきたジェンダー観や性役割感、男性性、女性性が直接的原因となってジェンダーに関する問題が生起するわけではないため、CIと関わる上でこれらを否定する必要はないといえる。しかし、これらが基盤となって用いられるTh自身のジェンダーに関する表現がコミュニケーションの循環に及ぼす影響について自覚的でなければならない。そして、ThはCI支援のために、自身の女性性、男性性を今ここで表現するのか、抑制するのかを選択していくことが求められる。

5. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、臨床心理士を対象に性差やジェンダーに関する問題生起のプロセスについて、CIとThの相互作用という視点から検討し、コミュニケーションの悪循環が見出されたことは成果であると考えている。しかし、性差やジェンダーをめ

ぐる問題は年齢や学歴、社会的地位などの要因とも複雑に絡み合っていると考えられるため、性やジェンダーが単独に影響しているわけではない。また、臨床心理士によっては使用する心理療法のアプローチや臨床現場が様々であり、臨床歴や訓練歴によってもThのコミュニケーション行動は異なると予想される。よって、それらとの関連も検討する必要がある。それらを踏まえた上で、問題生起に向かう悪循環を断ち切るような解決に導くコミュニケーション行動をどのように使用するかについて、そのプロセスを探索することが求められる。最後に、本研究ではセクシャルマイノリティの領域を含めた検討を行っていないため、今後は性別違和やセクシャルオリエンテーションも射程に入れた研究を行うことが必要となるだろう。

<付記> 研究にご協力いただいた20名の調査対象者の臨床心理士の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C) 研究課題番号22530732)を受けた。

引用文献

- 秋山泰子 (2003). ジェンダーセンシティブセラピー—中年期女性のカウンセリング カウンセリング研究, **36** (4), 333-341.
- 天野恵子 (2004). 性差に基づく医療とは—性差医学の概念と米国における発展 ホルモンと臨床, **52**, 3-10.
- 青野篤子・森永康子・土井伊都子 (1999). ジェンダーの心理学—「男女の思い込み」を科学する— ミネルヴァ書房
- Bateson, G. (1972). *Step to an ecology of mind*. New York : Brockman Inc.
- (バイトソン, G. 佐藤良明 (訳) (2000). 精神の生態学 改訂第2版 新思索社)
- Breuer, J. & Freud, S. (1895). *Studien über Hysterie*. Grin Verlag.
- (ブルーナー, J. &フロイト, S. 懸田克躬 (訳) (1974). ヒステリー研究 懸田克躬・小此木啓吾 訳 フロイト著作集7 人文書院 pp.3-229)
- Connell, R. (2002). *Gender* (1st ed.). Cambridge: Polity Press.
- (コンネル, R. 多賀太 (訳) (2008). ジェンダー学の最前線 世界思想社)
- 土居健郎 (1961). 精神療法と精神分析 金子書房
- Freud, S. (1912). The Dynamics of Transference. S.E. XII.
- (フロイト, S. 小此木啓吾 (訳) (1983). 転移の力動性について 小此木啓吾訳 フロイト著作集9 人文書院 pp.68-77)
- Freud, S. (1910) The Future Prospects of Psycho-Analytic Therapy. S.E. XI.
- (フロイト, S. 小此木啓吾 (訳) (1983). 精神分析療法の今後の可能性 フロイト著作集9 人文書院 pp.44-61)
- Freud, S. (1915). Observations on Transference-Love. S.E. XII.

- (小此木啓吾 (訳) (1983). 転移性恋愛について
フロイト著作集9 人文書院 pp. 115-126)
- Gilbert, L. A. & Scher, M. (1999). *Gender and Sex in Counseling and Psychotherapy*. MA: Allyn & Bacon.
- (ギルバート, L.A.&シェール, M. 河野貴代美 (訳) (2004). カウンセリングとジェンダー 新水社)
- 長谷川啓三 (2006). ソリューション・バンクーブリーフセラピーの哲学と新展開 金子書房
- 星野大 (2012). 研修症例 異性関係の背後にある母子分離の課題 精神分析研究, **56** (4), 427-432.
- 妹尾栄一 (2001). 性的嗜癖の治療: 性犯罪からセックス嗜癖まで アディクションと家族, **18** (2), 221-229.
- 伊藤公男・國信潤子 (2004). 女であることの損・得、男であることの損・得 伊藤公男・樹村みのり・國信潤子著 女性学・男性学—ジェンダー論入門— 有斐閣アルマ pp.1-17.
- Kernberg, O. (1965). Note on countertransference. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 13, 38-57.
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グランデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- 日下紀子 (2006). セラピストの妊娠・出産による不在をめぐる治療的相互交流 心理臨床学研究, **24** (3), 292-300.
- Miller, J.B. (1976). *Toward a new psychology of women*. Boston: Beacon Press.
- (ミラー, J.B. 河野貴代美 (訳) (1989). イエス、バットーフェミニズム心理学を目指して 新宿書房)
- 榎田多美・米田弘枝・浜田友子・賀茂登志子・金吉晴 (2004). ドメスティック・バイオレンス被害者の短期トラウマ反応とその回復—公立施設での一時保護活動を通して 心理臨床学研究, **22** (2), 152-162.
- 村本邦子 (2004). 性被害の実態調査から見た臨床的コミュニティ介入への提言 心理臨床学研究, **22** (1), 47-58.
- 中村このゆ (2011). 摂食障害と青年男女のボディイメージ、ダイエット体験、摂食態度、ジェンダー観. 追手門学院大学心理学部紀要, 5, 61-74.
- Sandler, J., Dare, C., & Holder, A. (1992). *The Patient and the Analyst - the basis of the psychoanalytic process* (2nd ed.). NY: International University Press.
- (藤山直樹・北山修 (監訳) (2008). 患者と分析者—精神分析の基礎知識— (第2版) 誠信書房)
- Sullaway, M. & Christensen, A (1983). Assessment of dysfunctional interaction patterns in couples. *Journal of Marriage and Family*, 45, 653-660.
- Watzlawick, P., Beavin, J. & Jackson, D.D. (1967). *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. NY: W. W. Norton & Company.
- (ワツラウィック, P., ベーヴィン, J. & ジャクソン, D.D. 山本和郎 (監訳) (1998). 人間コミュニケーションの語用論—相互作用パターン、病理とパラドックスの研究— 二瓶社)
- Zimmerman, D.H. & West, C. (1975). Sex roles, interruptions and silences in conversation. In Thorne & Henley (Eds.) *Language and Sex: Difference and dominance*. MA: Newbury House, pp.105-129.
- 山本清香 (2006). 女性外来に未来はあるか—社会的分析からわかったこと 性差と医療, **3** (5), 551-556.